様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月１日現在

機関番号：５３３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５２０２０２
研究課題名（和文）　近世日本漢詩総集『日本詩選』についての総合的研究

研究課題名（英文）　A comprehensive study on “Nihonsisen”, Anthology of Japanese *Kansi* in Edo period.

研究代表者
高島　要（TAKASHIMA　KANAME）
石川工業高等専門学校・一般教育科・教授
研究者番号：80124022

研究成果の概要（和文）：近世漢詩総集『日本詩選』『日本詩選続編』の漢詩に、作品番号を付し、電子化テキストを作成した。「日本詩選採択書目」をもとに、『日本詩選』に採録された漢詩の典拠となった詩集を確認し、採録の経緯を検討した。『日本詩選』の後世への影響として、後の総集への直接的な関係を考察した。採録された詩人を特定し『日本詩史』等との関係の検討を通して、『日本詩選』について文学史的に考察した。

研究成果の概要（英文）：The collection number was given to the *Kansi* of “Nihonsisen” and “Nihonsisen-zokuhen”, Anthology of Japanese *Kansi* in Edo period, and the text database was created. Based on “Nihonsisen-saitaku-syomoku”, original poetry text works of the *Kansi* recorded and selected were collected, and the circumstances of selection and recording were examined on it. As influence of the future generations on ″Nihonsisen″, the direct relation to the anthology of the future generation was also considered. The poet recorded and selected was specified and it considered like history of literature of ″Nihonsisen″ by examination of a relation with ″Nihonsisi”, etc.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：国文学、近世文学、漢詩文学、日本漢詩、漢詩総集、日本詩選、江村北海、

１．研究開始当初の背景
（１）関連する研究の動向

近世期の日本漢詩研究は、急速に且つ多角的な視点から進んでおり、有力な漢詩人や儒

学者を中心に、「新日本古典文学大系」「江戸詩人選集」等に作品の注釈的研究の成果が結実している。近時は、漢詩集あるいは漢詩作品自体を直接に研究対象として、その表現や様式、詩集の構成、また儒学者を一詩人の視点からみた作家論的研究も深まっている。

（２）本研究の位置づけ
①本研究は、文学特に漢詩文学の側から、具体的な作品や作者詩人の整理を通して、近世の漢文学研究、漢詩史研究の中に、位置づけられるものである。特に近世中期詩壇における漢詩集編纂の実態の解明、更にその後に続く総集を含めた、漢詩総集史研究の中に位置づけられる。
②近世漢詩の作品データベース作成研究の中に位置づけられる。
③近世漢詩人の伝記的研究の中に位置づけられる。
④総集、別集を併せて、近世漢詩集の実態研究の中に位置づけられる。

（３）研究代表者の従来の研究との関連や着想の経緯
①研究代表者は、既に日本漢詩総集『東瀛詩選』について、本文・採録漢詩人・編纂の背景や意義等の観点から総合的な研究を実施し、その成果として『東瀛詩選本文と総索引』を刊行していた。『東瀛詩選』は兪曲園によって編集され、日本の近世期漢詩を中心に編集されたものであるが、その際、兪曲園の参考とした漢詩総集に江村北海の『日本詩選』があった。『東瀛詩選』から遡って、『日本詩選』の研究によって、更に近世漢詩史を明らかにすることを着想した。
②『東瀛詩選』に採録された詩人の伝記には、江村北海の『日本詩史』や『先哲叢談』といった漢詩史についての著述の成果が反映されている。また、日本人江村北海による『日本詩選』から、中国人の編纂になる『東瀛詩選』まで、「漢詩総集」（詞華集）が漢詩文学史上において果たしている意義は大きいと思われ、研究代表者による従来の研究が本研究に活かされることを展望した。
③以上のように、研究代表者における、漢詩総集『東瀛詩選』についての研究は、近世の漢詩総集『日本詩選』の研究に、ひいては江村北海研究に展開し、本文研究・詩人研究・近世漢詩史的観点からの『日本詩選』の総合的研究を着想する契機となった。

２．研究の目的
（１）研究目的
本研究は、江村北海によって編纂された近世漢詩総集『日本詩選』ついて、漢詩本文の校定・作者詩人の伝記研究・漢詩集の構成や編纂意識についての考察及び漢詩本文のデータベース化を目的とする。発展して、同じく江村北海の『日本詩史』等を援用して、『日本詩選』の近世漢詩史における位置づけを考察する。もって近世日本漢詩研究における漢詩総集の基礎的研究及び近世中期詩壇の漢詩史的研究の一助とすることを目的とする

（２）研究の対象
本研究が対象とする近世日本漢詩集『日本詩選』は、『日本詩選』（正編）10 巻、『日本詩選続編』8 巻からなり、編者は江村北海で、採録された漢詩は、元和年間から安永まで江戸前期から中期の約 160 年間に及ぶ。成立は正編初版が安永３年（1773）、続編は安永８年（1779）であり、近世中期までの漢詩作品から佳編を撰集したもので、版行された近世期の最も重要な漢詩総集（詞華選）の一つである。これを対象に以下の基礎的研究、文学史的研究を行う。

（３）『日本詩選』の基礎的研究
①『日本詩選』の出版経過を明らかにする。安永３年初版から寛政６年版までが知られているが、その間またはその後も含めて、版行の実態を明らかにする。
②『日本詩選』に採録された別集及び総集を、「日本詩選採択書目」を参考に調査し、それらと『日本詩選』の本文との校合によって本文を校定する。
③『日本詩選』『日本詩選続編』の本文の電子化テキストを作成し、漢詩本文の整定研究及び索引作成のためのデータベース的基礎を確立する。
④『日本詩選』所収漢詩人についての、雅号・学統・著作等の調査を行い、その成果を『日本詩選』漢詩人データベースとする。

（４）『日本詩選』の文学史的研究
①『日本詩選』が編纂された経過を検討する。『日本詩選』は、当時の漢詩総集及び別集から漢詩を採録しており、巻頭に「日本詩選採択書目」として 157 種目（続編には、加えて 17 種目）が掲げられているが、これらの典拠となった漢詩集の本文と『日本詩選』の漢詩本文とを比較検討する。
②『日本詩選』の背景とその後の影響を具体的に検討することを通して、近世期における漢詩総集編纂の意義及び近世期後期詩集や『東瀛詩選』などへの展開や影響、ひいては公刊された本格的な漢詩総集の嚆矢といってよい『日本詩選』の文学史的意義を明らかにする。

３．研究の方法
（１）方法
①（構成）本研究は、２つの方法で展開され、また２つの段階的な計画のもとに実施する。

②（方法１）第一には、『日本詩選』の本文研究、すなわち原拠となった漢詩集との校合による漢詩本文の校定と、本文の電子化テキストの作成という、本文研究を中心とする基礎的研究である。
③（方法２）第二には、それをふまえて各収録詩人の評伝をはじめとする文学史の面からの位置付け、近世期における漢詩総集編纂の意義の考察等、総じて文学史的分野の研究である。
④（展開）原則的に、研究の初め２年度は基礎的研究を中心に行う。後半２年度はその基礎的な研究の成果をふまえて文学史的研究を進めるものとする。

（２）基礎的研究の全体的な研究計画
①『日本詩選』及び原拠となった漢詩集について、資料の収集（撮影またマイクロ複写による）を行う。
②資料の整理と検討及び考察を行う。
③電子化テキスト（ＯＣＲソフトなどを用いる）の作成及び索引化のためのデータベースの構築を行う。

（３）文学史的研究の全体的な研究計画
①収録詩人の伝記に関わる詩人研究を行う。（『漢文学者総覧』や『近世漢文学者伝記及び著述集成』等の先行の関連する研究成果を参考とする。）
②『日本詩選』の漢詩史における文学史的研究を行う。江村北海の『日本詩史』や近世の他の漢詩総集『熙朝詩薈』等と比較検討することで、『日本詩選』の編纂の意義や影響を具体的に検討する。

４．研究成果
（以下、研究の主な成果）

（１）『日本詩選』の諸伝本の研究
①『日本詩選』の伝本を調査し、初版本・再刻本（刊年入り）・再刻本（刊年不明）に整理した。併せて『日本詩選続編』の伝本を調査した。
②初版本である安永３年刊の内閣文庫本と、再刻本（寛政６年刊、石川県立図書館蔵川口文庫本）を比較して、初版と再刻の間での作品の異同を確認した。再刻においては、作者巌垣彦明の作品番号 10-079 が、詩題《漁村夕照》詩から《西播道中》詩に入れ替えられている。作品の交替はこれ１首であることを確認した。
③典拠詩集等の関連詩集の判明したものについて、作品の異同及び本文の異同を調査した。典拠等関連詩集が判明した作品は 789 首である。ほぼ尽くしていると思われるが、なお新資料の発掘によって更に増加する可能性はある。

（２）『日本詩選』正編・続編の詩数及び作者数の特定
①『日本詩選』正編は、詩数 1,414 首と特定した。
②『日本詩選』正編巻頭に掲げる「日本詩選作者姓名」と『日本詩選』本文とを照合して作者詩人を調査し、その異なり総数を 511 名と確定した。即ち、「日本詩選作者姓名」に掲げる作者 518 名（作者姓名には、のべ 520 名挙がるが、2 名は重複している）、そのうち 12 名については、「日本詩選作者姓名」にそれぞれ「一首」入集する旨掲げられているが、本文にはその作品がない。一方『日本詩選』本文に作品はあるが「日本詩選作者姓名」にその作者名が挙げられていない者が 5 名ある。以上を総じて『日本詩選』作者詩人 511 名を特定した。
③『日本詩選続編』は、詩数 1,278 首と特定した。その内訳は、続編本編（巻一から巻八まで及び補遺拾遺）が 1,156 首、その他に首巻が 122 首である。
④『日本詩選続編』について、しばらく異なり作者数は 615 名と確認した。その内容は、「続編作者姓名」には、567 名（うち 92 名は正編と重なる）が挙がる。その他に、続編首巻には 51 名が別に挙がる。従って延べ 618 名であるが、うち 3 名は首巻、続編の本編に重なる。

（３）『日本詩選』正編及び続編の本文の電子化テキストの作成
①『日本詩選』再刻本を底本とし、正編 10 巻の収録詩数 1,414 首の漢詩について、プレーンテキストファイルの電子化テキストを作成した。検索の便宜を前提として、JIS 外文字は大漢和番号（今昔文字鏡番号）により表現した。また巻別に作品番号を付し、詩題にタグを付すなどデータベース化できるように配慮した。
②『日本詩選続編』10 巻の収録詩数 1,278 首の漢詩について、プレーンテキストファイルの電子化テキストを作成した。検索の便宜を前提として、JIS 外文字は大漢和番号（今昔文字鏡番号）により表現した。また巻別に作品番号を付し、詩題にタグを付すなどデータベース化できるように配慮した。以上によって、日本詩選の正編・続編の作品数、作品番号を確定した。正編・続編とも一部作品には校異を付した。

（４）『日本詩選』の採択書目についての研究
①『日本詩選』巻頭に掲げる「日本詩選採択書目」収載の 157 種の書目の伝存状況を確認した。『日本詩選』の編纂の経緯を考察するには、「採択書目」の検討を通して、典拠と

なったと思われる詩集との関係を具体的に明らかにすることが重要であるとの認識を得た。
②書目には、「採択書目」に該当しないものがあることを確認し、書目詩集との関係を以下のように整理した。
ア、書目の詩集等が、現存資料によって、ほぼ採択対象のものであると思われるもの。
イ、書目の詩集等が、現存資料によって、それが採択対象のものに近いものと思われるもの。
ウ、書目には挙げられているが、その詩集と思われる現存資料で、日本詩選の収録作品が確認できないもの（「日本詩選採択書目」とは言えないと思われるもの）。
③逆に「日本詩選採択書目」に無い書目を新たに典拠詩集として追加することができた。即ち「日本詩選採択書目」に挙げられていないが、現存資料の詩集あるいはその稿本が、「採択」の際に用いられたと思われるもの（「日本詩選採択書目」として加えてよいと思われるもの）である。
④以上により「日本詩選採択書目」は、採択書目としては掲げるべきではない詩集書目を含み、逆に分注の断りを考慮しても、採択書目として掲げるべきであったと思われる詩集が相当数ある。典拠が確認できたと思われる作品は、全体の半数強であることなどを勘案すると、採択書目の実際も、現在判明できるものの外に、なお相当数の詩集を想定する必要がある、との認識を得た。
⑤『日本詩選』の典拠詩集として、これまでに合計 100 種余の書目を確認した。これは、全詩作品のほぼ半分強に相当する。現存資料からはほぼ尽くしていると思われるが、なお新資料の発掘によって今後も新たに判明する可能性はある。

（５）『日本詩選』の作者詩人と文学史的研究
①「日本詩選作者姓名」「日本詩選続編作者姓名」と、本文詩作品を検討して、日本詩選及び日本詩選続編の作者詩人を特定した。
②以上の作者詩人について、従来の漢学者や詩人伝についての研究成果をふまえて伝記的研究の基礎データを作成した。
③『日本詩選』の編纂とその影響について文学史的観点から考察した。一つは、『日本詩史』との比照である。江村北海『日本詩史』は、『日本詩選』以前に刊行された。近世の漢詩史を記述する『日本詩史』に言及される詩人は、『日本詩選』採録詩人にも多く重なる。そこに記述される漢詩集と『日本詩選』に採択された漢詩集を比照することによって、『日本詩選』編纂における詩集の採用状況を文学史的に観察することができるものがある。『日本詩選』と『日本詩史』を具体的に、詩人・詩集の観点から比較検討した。二つには、『日本詩選』の後世への影響について考察した。例えば後の未刊行総集『熙朝詩薈』は、その具体的な採択詩人及び詩作品から、一部に『日本詩選』からの直接影響が認められることを確認した。

（以下、成果の位置づけ・今後の展望など）

（１）近世文学研究における、漢詩文研究、特に漢詩総集についての研究を進める基礎的な資料を、『日本詩選』について提供することができた。

（２）近世中期漢詩文芸史の中に、江村北海の果たした役割の重要性を改めて指摘することができた。

（３）本研究の成果の一部は、平成 23 年度日本近世文学会春季大会に報告され、同学会において一定の評価を得た。直後に高橋昌彦「『日本詩選』の編纂と刊行」も報告され、本研究の成果も引用されており、『日本詩選』研究の新たな展開の一助となっている。

（４）『日本詩選』の典拠となった詩集の探索は今後も継続され、新たな資料の出現により、典拠詩集をより広く特定できる可能性がある。近世漢詩集の実態を把握する研究を更に発展させる可能性をもつ。

（５）漢詩総集である『日本詩選』の研究と併せて、この影響下にあることが確認された、同じく近世漢詩総集である『熙朝詩薈』研究に、有機的に発展させていくこととしている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 高島要、「日本詩選採択書目」考稿（四）、石川工業高等専門学校紀要、査読有、44 号、2012、1-10、
② 高島要、「修訂日本詩選採択書目」のために、金沢大学国語国文、査読有、36 号、2011、36-47、
③ 高島要、「日本詩選採択書目」考稿（三）、石川工業高等専門学校紀要、査読有、43 号、2011、1-10、
④ 高島要、「日本詩選採択書目」考稿（二）、石川工業高等専門学校紀要、査読有、42 号、2010、1-12、
⑤ 高島要、「日本詩選採択書目」考稿（一）、石川工業高等専門学校紀要、査読有、41 号、2009、1-12、

〔学会発表〕（計２件）

① 高島要、「日本詩選採択書目」考、日本近世文学会・平成 23 年度春季大会、2011 年 6 月 12 日、日本大学文理学部（東京都）、

② 高島要、『日本詩選』に採択された詩集書目について、北陸古典研究会・2010 年度上半期研究発表会、2010 年 8 月 28 日、私学共済兼六荘（金沢市）、

６．研究組織

(1)研究代表者

高島　要　（TAKASHIMA　KANAME）

石川工業高等専門学校・一般教育科・教授

研究者番号：80124022

(2)研究分担者

無

(3)連携研究者

無